

## モネを語るマッソン

### —— シュルレアリスムの画家による印象派絵画の解釈

早稲田大学 古屋 詩織

アンドレ・マッソン (1896-1987) は、初期シュルレアリスムに参加し、この運動のリーダーである詩人アンドレ・ブルトンが理念として掲げた「オートマティスム」を絵画で実践することを試みた画家である。本発表は、マッソンが1952年にフランスの美術雑誌『ヴェルヴ』に執筆した論考「創始者、モネ Monet Le Fondateur」に着目し、この論考の反響をたどるとともに、この論考のマッソンにとっての意義を探ることを目的とする。

マッソンはこの論考で、クロード・モネの創作を絵画の発展における衝撃的な転換点と位置づけ、オランジュリー美術館のために《睡蓮》の大作を描いたモネをミケランジェロにたとえながら「オランジュリーこそ印象派のシステーマ礼拝堂である」と書いた。このくだりは、第一次世界大戦後のさまざまな前衛芸術運動のかけで忘れられた存在となっていたモネがやがて復権するという文脈において、現在も繰り返し引用されている。また、この論考の反響は、フランスだけでなくアメリカにも及ぶ。美術批評家クレメント・グリーンバーグはマッソンのモネ論に言及している。また、ニューヨーク近代美術館はアメリカ抽象表現主義に歴史的な正当性を与えるという目的をもって、ジヴェルニーに残されていた大画面の《睡蓮》を購入するに至る。以上の事柄から、マッソンの論考はあたかもモネとアメリカ抽象表現主義をつなぐ役割を進んで引き受けているようにもみえるが、1952年時点でのマッソンにはその意図はなかったであろう。実際、マッソンはこのモネ論で何を主張しようとしたのか。

マッソンのテキストにおいて反復され強調されているのは、モネが「形を区切らない」という点である。だからこそ奔放な筆触がもたらされる。ただしマッソンの論点は、モネの創作において「アプリオリな形」はないこと、「色彩の高揚が輪郭の否定へ向かう」こと、すなわち「形という限界が否定される」ことである。モネ論を執筆した1952年頃のマッソンの油彩を見ると、たしかに輪郭線を排除している。画歴をとおして線を優位とする創作が多いマッソンにおいては稀なアプローチと言える。

さらに注目すべきなのは、モネが「形を区切らない」ために生じる混沌とした様相をマッソンが肯定的に述べている点である。これは、マッソンとブルトンの唯一の共作『マルティニーク島 蛇使いの女』のなかの両者の対話を思い起こさせる。亡命時に寄港したマルティニーク島で、捉えがたいほどの繁殖力をみせる大自然を目前にして、ブルトンは形あるものについて、他方マッソンは形にならないものについて発言する。両者は生涯をとおして「オートマティスム」という語にみずからの考えを託そうとしたが、「形」をめぐる彼らの視点は異なっている。マッソンのモネ論は、ブルトンを中心にしたシュルレアリスムとマッソンの差異を示す一例となっている。